

平成24年企画展

「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析

西島太郎

はじめに

本稿は、平成二四年春に松江歴史館で開催された企画展「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」——野口英世の親友 堀市郎とその父樗山——の開催経緯を記録する展覧会記録である。博物館の展覧会は一過性のものであり、展覧会が終われば何の記録も残さないものが多い。企画展図録が作成される場合でも、開催までの研究成果は収載できるが、開催中・開催後に明らかになった知見が記録され公表されることは少ない。開催後に明らかになった事実を、新たな展覧会として公表できる期間があればよいが、そのような機会は少ないのが現実である。

近年、企画展が一過性の「祭り」に終わらせるのではなく、期限付きではあるが学芸員や所属する館が時間と労力を投入して調べあげ、明らかにした成果を、記録し、分析・公開していく努力が、博物館全体のなかでも求められるようになってきた（博物館協会編集・発行『博物館研究』四七―七、二〇一二年の特集「博物館展示の記録化」）。展覧会では、図録が作成され展示物の概要がわかればよいのではない。図録には、覧会開催に至る経緯や、その後の成果・影響といった点は記録されない。その意味でも、展覧会開催に

至る経緯と、その後の反響を記録し、開催した展覧会について考察を加えることは、次の展覧会での展示方法など改善の指針を得るといっても意味があると考えられる。

本稿は、以上の問題関心に基づき、企画から開催まで私が担当した展覧会である「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展を記録し、開催の経緯や成果やその後の展開にまで言及し、今後の企画展示に参考にしたい。

一 企画展開催の経緯

本章では、企画展の開催経過を記録することで、展覧会の開催までの経緯や反響を明らかにする。

二〇一〇年二月か三月 神奈川県横浜市の佐野稔夫氏から堀樗山資料の調査を依頼される。

三月 他の資料調査の序に埼玉県川口市の佐野好作氏宅（稔夫氏兄）で最初の調査。その後、展覧会開催まで何度も調査に訪れる。資料の整理・研究を行う。

二〇一一年一月 年間スケジュールを決めるため、一年後の企画展とするこ

とを決める。西島が担当することとし、展覧会名を「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。——ニューヨーク、野口英世の親友 堀市郎とその父櫟山——」と決める。

三月一九日(土) 松江歴史館が開館する。

九月六く九日【集荷】秋の企画展で関東方面へ資料の集荷に行くのに合わせ、埼玉県川口市の佐野好作氏宅で資料を借用。

その後、展覧会の開催までに、ポスター、チラシ、幟を制作し、配布・設置。キャプション、バナー、演示具の発注と制作。図録掲載のための写真撮影。図録の入札、発注。運送会社との美術品輸送・保険の契約。

二〇一二年一月一四日(土)【集荷】松江の堀氏宅から資料借用。

一月一六日(月)【報道】二四日(日)に松江歴史館で堀市郎撮影肖像写真100枚の公開について報道発表する旨を報道へ投げ込む。

一月二四日(日)【報道】午後一時半から一時間、松江歴史館歴史の指南所にて堀市郎撮影肖像写真100枚の公開について報道発表。共同通信社、朝日新聞社、産業経済新聞社、毎日新聞社、山陰中央新報社、中国新聞社、島根日日新聞社、NHKが取材に来る。午後六時〜七時のNHKの地方ニュース(しまネット) 枠のなかで採りあげられ放映。

一月二五日(水)【新聞】①産経新聞二六面社会欄で「東郷元帥、野口英世の妻、雪洲：米で活躍、松江出身写真家の120枚発見」と題し、カラーで報道公開風景写真と共に掲載。②日本経済新聞三九面社会欄の「窓」で報道公開風景写真と共に掲載。③山陰中央新報二四面山陰欄で「米国で活躍した松江出身写真家 堀市郎の作品100点公開 松江歴史館 東郷平八郎肖像など」(掲載写真は市郎肖像、東郷平八郎)と題して掲載。④島根日日新聞一面で「堀市郎の未公開作品を発表 松江出身の写真家、

ニューヨークで活躍 松江歴史館、春の企画展で展示」と題し、公開風景写真と共に掲載。⑤福島民報二十面社会欄で「野口英世の妻など120点堀市郎(松江出身)撮影写真を発見」(掲載写真は報道公開風景)と題しカラーで掲載。⑥KYODO NEWS(電子版)に「Photographer Horis works disclosed to media」と題し英語、カラーにて報道公開風景と共に掲載。⑦The Mainichi Daily News(電子版)に「Photos taken by famed Japanese photographer in N.Y. in early 20th century found in Japan」と題し英語にて掲載。

一月二六日(木)【新聞】①The Japan Times 二面 national 欄で報道公開時の風景と共に「Famed photog Horis works found in Saitama」と題し掲載。②中国新聞二十六面島根欄に「堀市郎待たれる再評価 東郷平八郎・野口英世の妻ら撮影の写真家 明治・大正期NYで活躍 おい所蔵古里松江で展示へ」(掲載写真は報道公開風景、堀市郎写真、東郷平八郎肖像写真)と題し、カラーで掲載。③山陰中央新報(電子・英字版)に「Photos taken by famed Japanese photographer in N.Y.」と題し英字で掲載。

一月三〇日(月)【新聞】山陰中央新報一六面「ウィークリー・ファイル news」島根欄に「堀市郎の写真を公開」と題し掲載。

二月一日(水)【集荷】松江の安部氏宅から資料借用。
二月九日(木)【新聞】朝日新聞二十五面島根欄で「米で活躍 堀市郎知って東郷平八郎・野口英世の妻ら撮影 出身地松江で来月企画展 写真家の足跡たどる」と題し、市郎肖像、東郷平八郎、メリー・ダージス三枚のカラー写真とともに掲載。

二月二二日(木)【新聞】福島民友二二面「窓 読者のページ」欄に「不思議

な縁ある英世のお隣さん」と題し、松江市の引野律子氏の投稿原稿が掲載。

二月二十九日(水)【新聞】毎日新聞二三面島根欄の「カメラ紀行」で「堀市郎の作品公開 松江歴史館 来月20日から 写真機通し20世紀の肖像」と題し、写真機、市郎肖像、東郷平八郎、メリー・ダージス、清水善造、報道公開時の風景と六人の写真とともに掲載された。

三月五〜七日【輸送】福島県猪苗代の野口英世記念館から借用する資料の集荷。

三月六日(火)から一〇日(土)【新聞】山陰中央新報島根欄で、「ハローミスター・ホリ 海を渡った写真家・堀市郎」と五回にわたって市郎の事迹を紹介。いずれもカラー掲載。①「名声 高い技術駆使し米に17年」(掲載写真は一九〇三年撮影堀市郎肖像)、②「父・櫛山 反発の一方で尊敬の念」(掲載写真は堀櫛山家族写真と市郎撮影早川雪洲肖像)、③「松江 写真館で働き技術学ぶ」(掲載写真は山陰道商工便覧の森田写真館)、④「資質 大胆さと繊細さを兼備」(掲載写真は市郎撮影東郷平八郎写真)、⑤「親友 野口英世と気心通わす」(掲載写真は堀市郎撮影野口英世肖像写真)、⑥「謎 帰国後突然、画家に転身」(掲載写真は市郎撮影女性、写真機)。

三月七日・一四日・二一日(各水)【新聞】山陰中央新報一七面文化欄「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる」展」と題し、上中下の三回、タイトルは、上「堀良蔵 軍艦八雲丸の「火炮打方」 英語覚え船中日記残す」(掲載写真は良蔵肖像油絵)、中「堀櫛山 島根県初の美術学校開校 閉校後絵師として生きる」(掲載写真は櫛山筆虎豹図)、下「堀市郎 米で写真家として活躍 野口英世と交流、支える」(掲載写真はコニ

ーアイランドで遊ぶ野口英世・堀市郎・桑原羊次郎)を西島が執筆。三月一〇日(土)【集荷】島根県立美術館へ作品の集荷に行く。日通の美術専用車にて搬入。

三月一五〜一八日【展示】一五・一六日は日通の作業員に手伝ってもらっての展示作業。松江歴史館企画展示室。展示総点数二一八点。写真資料はマスキをし、細心の注意を払い設置。温湿度の確認、照度を七〇ルクスで調節する。

三月十九日(月)【内覧会】午後一時半〜三時

①人数 三八名出席(他内部関係者9名) ②アメリカニューヨークおよびコロラド州からも二組の夫妻が来席。③市長・館長挨拶、④佐野稔夫氏に所蔵者挨拶をもらったこと。⑤西島が解説。

三月二〇日(火・祝)①【企画展開催】午前八時半〜午後五時(四月から午後六時閉館)。企画展観覧料 一般五〇〇円 小・中学生二五〇円。②【図録】『平成24年企画展 松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。——ニューヨーク、野口英世の親友 堀市郎とその父櫛山——』(松江歴史館。一〇〇〇部印刷)刊行。③【著書】『野口英世の親友 堀市郎とその父櫛山——旧松江藩士の明治・大正時代——』(西島太郎著、ハーベスト出版。七〇〇部印刷)刊行。④【新聞】山陰中央新報二二面山陰欄に「きょうから堀市郎展 父親・櫛山の写真も 松江」(掲載写真は展覧会場)をカラーで掲載。

三月二一日(水)【新聞】毎日新聞二七面島根欄「時代を駆けた先人 明治〜昭和 堀市郎(写真家)と櫛山(画家) 松江歴史館企画展」(写真は展示風景)と題し展覧会開催について掲載。

三月二四日(土)【ギャラリートーク①】午後一時半から一時間、西島による

ギャラリートーク。八名参加。

三月三十一日(土)【講演会】午前一〇時〜一一時半。講師 小松山六郎氏(野口英世記念会事務局長)。演題「世界で活躍した先駆者——ニューヨークでの野口英世・堀市郎などとの交友——」。会場 松江歴史館歴史の指南所。聴講料三〇〇円。三二名参加。小松山氏は白衣に付け髭をされ、野口英世になりきり、東北弁で講演。新しい講演スタイルだと感心する。「今日は講演のためにニューヨークからきました。」(スライドを見ながら英世の写真指さし)「これが私です。」など、親しみと臨場感をもった講演であった。

四月三日(火)【ラジオ】FM山陰(ラジオ)の「だんだんインフォメーション」にて午後四時五十分から五分間、西島が企画展の内容・見どころを告知。

四月六日(金)【テレビ】山陰ケーブルテレビ(マール)の「市民のみさんこんにちは」にて午後六時三十分から三〇分のうちで西島が企画展の内容・見どころを告知。七日も放送。

四月七日(土)【小講演会】午後二時〜三時半。講師 西島太郎(松江歴史館学芸員)。演題「知られざる旧藩士の転身——堀良蔵・櫛山・市郎——」。会場 松江歴史館歴史の指南所。聴講料一〇〇円。四二名+新聞記者一名参加。佐野稔作氏の孫夫妻がタイのバンコクから駆けつけていただいた。また堀家に連なる親類縁者が多く集まるきっかけとなった。

四月八日(日)①【新聞】山陰中央新報二四面山陰欄で、カラーの写真入りで「歴史館で講演 松江出身写真家・堀市郎 父・祖父と3代前向きな人生」と題し、講演内容を要約して掲載。②【ギャラリートーク②】午後一時半から一時間、西島によるギャラリートーク。一〇名参加。

四月一日(火)【新聞・市民の反応】山陰中央新報二〇面読者の広場欄で、

「堀市郎の写真を見て学んで」と題し、引野律子氏の投書が掲載。

四月一日(土)【新聞】山陰中央新報二五面島根欄で「写真家・堀市郎と父・櫛山 文献たどり足跡に光」と題し、カラー写真入りで掲載(一部の誤字は十八付二二面で訂正記事)。

四月九日(木)【展示替】会期中唯一の休館日。展示替え(後期展示物および新たに被写体が判明した市郎撮影六名の写真)を行う。六名とは、新渡戸稲造、後藤新平、アレクシス・カレル、原田武一、秦佐八郎、斎藤博。

四月二一日(土)【ギャラリートーク③】午後一時半から一時間、西島によるギャラリートーク。一六名参加。

四月二〇日(金)【報道】報道へ市郎撮影の写真の人名が判明の投げ込みを行う。

四月二一日(土)【新聞】記念講演会で講演してくださった野口英世記念会事務局長の小松山六郎氏が、福島民友八面読書欄「@BOOKカフェ」において、「西島太郎著「野口英世の親友・堀市郎とその父櫛山」「知られざる逸話も」と題し、「新発見の資料に裏付けられていて読み応えがある。」と紹介していただく。

四月二四日(火)【新聞】島根日日新聞一面で「新渡戸稲造ら6人を確認 展示中の堀市郎作品から 松江歴史館」とタイトルを付け、展示している堀市郎撮影の新渡戸稲造肖像写真と共に掲載された。

五月三日(木・祝)【ギャラリートーク④】午後一時半から一時間、西島によるギャラリートーク。二九名参加。

五月六日(土)【閉会】午後六時半閉館。展覧会終了。

五月七〜九日【撤収】七・八日は日通の作業員に手伝ってもらう。

五月十一日(金)【返却】島根県立美術館へ作品を日通の美術専用車にて返却。

五月十二〜十五日【返却】福島県の野口英世記念館、埼玉県の佐野好作氏宅へ借用資料を日通の美術専用車にて返却。

五月十八日(金)【新聞】山陰中央新報二二面文化欄で、西島が「松江市出身の青年写真師 堀市郎の上京と小泉八雲——交流通じ渡米決意、八雲の手紙に謎解くカギ——」と題して文章を掲載する。

五月二十一日(月)【返却】松江の安部吉弘氏宅へ資料を返却。

五月二十五日(金)【返却】松江の堀氏宅へ資料を返却。松江の個人(K氏)へ資料を返却。

五月二十六日(土)【返却】松江の阿羅波比神社へ資料を返却。

六月二〇日(水)【雑誌】『元町だより』第五〇号(神奈川県横浜市元町自治運営会、五頁)に「堀市郎の写真展 郷里の松江で開催さる——戦中戦後、元町代官坂に住んでいた画家——」との見出しで、展覧会の様子を紹介される。

八月四日(火)【新聞・市民の反応】山陰中央新報二二面読者の広場欄で、「野口英世博士と松江との縁」と題して松江市西川津町の石策重喜氏(八二歳)の投書が掲載。

八月二三日(木)【雑誌】『野口英世記念会報』五七号(財団法人野口英世記念会発行)に、「各地で行われた野口英世博士関連展示」として「堀市郎・父樫山の企画展 松江にて開催」と題し、展覧会の様子など紹介される。

一〇月四日(木)【展覧会・図録】一〇月六日から十一月二十六日の会期で開催される島根県立石見美術館(島根県益田市)の企画展「東京藝大美術館所蔵 日本近代美術の名品展——森歐外と米原雲海を中心に——」で、

堀樫山画「出雲大社」「堀良蔵肖像」、方圓学舎の資料「私立画学校設置

之儀伺書」「生徒入学年月留扣」「生徒出席簿」が展覧された。企画を担当された左近充直美氏の解説(キャプションおよび展覧会図録)では、「出雲大社」で描かれた大社の拝殿が昭和二八年消失前の状況を知ることができる資料となること、「堀良蔵肖像」では、「リアルさを追求しつつ、塗り込んで逆につべりとしたような油彩表現は、高橋由一(『丁髷姿の自画像』(笠間日動美術館蔵)などの人物画と共通点がある」と、高橋由一の画風と通じる点を指摘。

一二月四日(火)【展覧会・図録】一二月四日から二十五日の会期で、日本カメラ博物館(東京都千代田区)のJCIフォトサロンで開催される企画展「堀市郎・前田寅次郎作品展——Japanese Photographers in America 1910-1930——」で、堀市郎の写真約七〇点および写真機が展示され、図録も発売された(白山眞理・栗村恵美編、JCIフォトサロン刊、全三二頁)。広報チラシには「明治末期から昭和初期にあたる1900年代〜1930年代のアメリカに住み、技術を磨きながら写真表現と「に」取り組んだ、二人の日本人写真家のオリジナルプリント展です。ニューヨーク在住の堀市郎は写真館で肖像写真に励み、ロサンゼルス在住の前田寅次は国際サロンへの応募を重ねました。大陸の東西でそれぞれに力を尽くした彼らの作品は、日本写真界のリーダーであった福田信三によって母国へも紹介されました。「現在は知られざる作家となっている堀、前田の作品は、大戦間の芸術写真における世界潮流をも示しています。セピア色の流麗なオリジナルプリントの世界をぜひお楽しみください。」とある。

一二月一六日(火)【講演会】金子隆一(東京都写真美術館専門調査員)・白山眞理(日本カメラ博物館運営委員)両氏によるトークショー「ピクト

リアリズム——ポトレートと国際写真サロン」が開催された。「戦前の国際的な芸術写真について、最新の調査による知見と深い考察」(チラシによる)が語られた。堀市郎に関する白山眞理氏の指摘は次の三点。①

写真雑誌『アサヒカメラ』一九二七年七月号(第四卷第一号、東京朝日新聞社・大阪朝日新聞社)掲載の、市郎の原稿「情緒と印象の靈感を求む——余の写真に就て——」で、写真が芸術か否かの議論をし、いつも写真は芸術に非ずとの結論に至ったと述懐しており、市郎は早い段階で、芸術としての写真を追求していたのではないかと、と白山氏は指摘する。

②また、福原信三の創立した写真芸術社の雑誌に、堀市郎の写真が掲載されており、市郎が一九二九年に帰国すると、一九三一年に信三が監査委員をやっている国際写真サロンの委員に市郎がなっている。これは信三との繋がりのなかでのことではなかったか。さらに一九三七年のダゲレタイプ発明一〇〇年祭で堀が表彰された理由を、外国での活躍だけでなく、上記の日本での写真指導による功績によるものとみる。

③市郎は表現を追求する写真家であり、その写真は、焼き付けにひと手間かけ、保存性が高まる金調色で色調表現をしたものもある。また紙ネガによる作品製作も行っていたことを指摘した。

二月一八日(日)【著書】中川織江『セツシユウ! 世界を魅了した日本人スター・早川雪洲』(講談社)刊行される。「おわりに」(三六四頁)にて松江歴史館で展示された堀市郎撮影早川雪洲肖像写真について触れる。

二月二〇日(木)【新聞】朝日新聞東京版二八面に「著名人N.Yの肖像/100年前、5番街に誕生の日本人写真館/千代田で秘蔵写真展」と題してJ.C.IIの企画展を紹介。堀市郎撮影の早川雪洲、東郷平八郎、メリー・ダージス、新渡戸稲造、堀市郎肖像写真、三浦環の写真六枚を掲載。翌

日、同新聞千葉版にも掲載された。

二 アンケート調査の結果と分析

【1】入館者・観覧者数

企画展開催期間 三月二〇日(火・祝)～五月六日(火) 四七日間

松江歴史館敷地内への入館者数(無料ゾーン含む)

計三〇、九九〇人 一日平均六五九人

基本展示及び企画展示観覧者数(有料ゾーン)

計 六、三〇一人 一日平均一三四人

企画展示観覧者数(有料ゾーン)

計 三、一〇七人 一日平均 六六人

「分析」 無料ゾーンを含む敷地内への入館者数の五人に一人が、有料ゾーンである基本展示・企画展示を観覧している。無料ゾーンから有料ゾーンへ誘導する工夫が必要である。また、有料ゾーンへ入った人の半分が企画展示を見ている。基本展示だけでなく、企画展示までも見てもらえる工夫が必要である。敷地内へ入った人の一〇人に一人しか企画展示を見ていない。無料ゾーンから有料ゾーン、基本展示から企画展示という二つの導線の誘導に工夫することが求められる。この点は、次の展示から、無料ゾーンにテレビによる企画展の内容紹介を流すことで、一部改善が図られた。

【2】企画展示アンケート

企画展示室を出たところに机を設置して、アンケートを取った。アンケートの回答者は八七名で、企画展観覧者数(三、一〇七人)の二・八%にあたる。

アンケートの項目 1 来館日 2 年齢(10代毎) 3 性別 4 居住地(県

外、県内) 5何で知ったか(複数回答可) 6これまでの来館回数 7企画展の評価 8企画展についての意見・感想

①年齢

10歳未満3(3%) 10歳代12(14%) 20歳代5(6%) 30歳代7(8%) 40歳代12(14%) 50歳代6(7%) 60歳代26(30%) 70歳代以上15(17%) 無回答1

「分析」 世代としてはほぼ全世代の観覧があるが、60歳以上が47%を占める。約半数が高齢者である点、キャプションの文字の大きさなどに配慮が必要である。

②性別

90人中(一枚に二名記入あったため) 男性38(42%) 女性50(56%) 無回答2(一枚に二人が記入3)

「分析」 やや女性が多い。

③居住地

87人中 県内63(72%) 県外22(25%) 無回答2

「分析」 全体の4分の1を占める県外者のほとんどは観光客と考えられる。県内居住者による観覧が多く、地元での関心が高い事を示す。当館が、観光客よりも、地元住民の熱意・関心により支えられていることを示す。

④何で知ったか(複数回答可)

117回答中 新聞22(19%) テレビ1(1%) 雑誌1(1%) ポスター・チラシ29(25%) HP8(7%) 看板8(7%) 知人からの紹介29(25%) その他

の他19(16%) 無回答1

「分析」 「ポスター・チラシ」と同比率で「知人からの紹介」が占め、併せると全体の半分を占める。観覧者4人に1人が、口コミにより来館している。また道の駅でのポスター・チラシを見てきたという人も1人いた。「その他」の多くは「たまたま通りかかった」と同内容の回答が多く、観光客の割合が高いと思われる。新聞により知った人も約2割いることから、新聞記事で多く取り上げられるようにすることや、新聞広告を打つ工夫が必要である。

⑤これまでの来館回数

初めて41(47%) 2-4回程度27(31%) 5-9回程度13(15%) 10回以上5(6%) 無回答1

「分析」 約半数が初めて松江歴史館を訪れた人である。このことは、当館の認知度がまだまだ低いことを示している。観光客は、居住地の分析から全体の4分の1と推計されるので、企画展により初めて当館を訪れる地元人が多いことを示す。魅力ある企画展を継続的に企画し、新たな地元住民の来館を促す必要がある。

⑥企画展の評価

大変よかった59(68%) 良かった19(22%) ふつう3(3%) あまり良くなかった1(1%) 良くなかった3(3%) 無回答2
「分析」 68%が「大変よかった」と回答した。「良かった」と合わせると、90%が良かったと回答している。「あまり良くなかった」「良くなかった」が5%ある。

⑦企画展に対する意見・感想(回収順)

- ・500円とは驚き。タイトルに魅かれ入ったが。果たして画家と言えるのか(60代、女性、岡山)。
- ・すてきな写真でした(60代、女性、市内)。
- ・この様な偉人のあった事は、松江の誇り(70代以上、男性、東出雲町)。
- ・初めての事で、大変嬉しい気がいたしております(70代以上、女性、県内)。
- ・興味津々です。旧藩士達の志の高さが窺われました。企画と展示までの手数の大変さが窺われました(70代以上、男性、安来市)。
- ・油画が暗くて見づらい。この暗さが展示品への配慮ならばその旨を記してほしい。また賞を得たという作品が見てみたかった(20代、女性、大田市)。
- ・つまらなかった(30代、男性、市内)。
- ・貴重なものがいっぱいあった(10代未満、女性、市内)。
- ・堀市郎氏についてのアピールが足りないと思いました。もっと彼の遺した業績を称えてほしいと思います(70代以上、女性、市内)。
- ・松江出身で堀さんという大変すばらしい人が出ているのに、誰も知らず……。もっともっとアピールすべきです。銅像でも出来ても良いと思える人物だと思いました(60代、女性、市内)。
- ・昔のカメラは今の物と違ってびっくりしたけど、カッコ良かったです(10代、女性、市内)。
- ・松江の事を沢山企画してください(40代、男性、市内)。
- ・とても面白く見せてもらいました(10代、女性、出雲市)。
- ・野口英世の事が良くわかりました(60代、男性、静岡県)。
- ・今まであまり良く知らなかった事が、沢山あり、良い機会でした。郷土の優れた先人の紹介も今後企画してください(60代、男性、出雲市)。
- ・暗くて良く見えなかった。写真が少ない(60代、男性、市内)。
- ・ほとんど知らない人物の企画展でしたが、展示を見るとどんどん興味が湧いてきました。地元の人物の偉業を知るのは、大切ですね。今後も宜しく願います(40代、女性、市内)。
- ・立派な企画展に感動しました(70代以上、女性、大阪府)。
- ・感銘を受けました。すばらしい発見をしていただき感謝しています(40代、男性、市内)。
- ・すごい人が松江にいたと知り、驚いたし嬉しかった(20代、女性、出雲市)。
- ・又来ます。120点(70代以上、男性、県内)。
- ・幕末・明治初期の歴史の出来事を、簡潔に表にして、堀家主人の活躍を記したら、歴史的拝啓が良くわかると思うが如何(70代以上、男性、市内)。
- ・ボランティアの引野さんと西島学芸員から、疑問点の数々を丁寧に教えていただき、大変多くの事を学ぶことができた。ニューヨークで親交を結んだ堀市郎と野口英世は、先祖が猪苗代で関連があったことなど、何も知らずに親しく付き合っただけということだが、きっと深いご縁がそうさせたのだと思う(60代、男性、出雲市)。
- ・堀市郎さんとは、個人的に知友の関係にありますので、大変なつかしく拝見させて頂きました(70代以上、男性、神奈川県)。
- ・堀市郎さんのことを採りあげての企画展、横浜から来た甲斐がありました。ありがとうございます(70代以上、女性、神奈川県)。
- ・地元の紹介をいっぱいしてほしい(60代、女性、安来市)。
- ・松江にこのような方(堀市郎)がおられた事がわかり良かったです(70代以上、男性、市内)。
- ・もう少し本人の作品を見たかった。他にもいろいろあるらしいので、また

企画してほしい（40代、男性、市内）。

・松江にあの当時、自由な生き方をしていた人たちがいた事がわかり良かった（60代、女性、市内）。

・郷土史愛に溢れた、素敵な展示内容でした。会館の設えも感じ良いものでした（60代、女性、静岡県）。

・野口英世さんの隣の家に住んでいたと知って、良かったです。もっと知りたくまりました（10代未満、女性、出雲市）。

・珍しい写真・絵に野口英世との交流、自画像等ふれることができ良かったです（40代、女性、市内）。

・初めて知ることばかりでした。展示の解説が丁寧で判りやすいものでした。このくらいの量の展示なら、疲れない程度で、全部読むことができました（50代、女性、市内）。

・カメラが良かった。野口英世の奥さんが外国人だと思つてびっくりした（10代、男性、安来市）。

・ここまでよく資料が汚れないで保管されていましたね。テレビor映画にしたらどうでしょうか（60代、男性・女性二人、市内）。

・懐かしい私の母方、祖母、伯母の写真も見る事が出来、感激しました。宝塚から娘のつきそいで出かけ、大変有意義な展示会に出会えて、大変うれしく思いました。祖先のルーツに改めて深く知りたいと思いました（70代以上、女性、兵庫県）。

・私の父方の曾祖父は三谷鍊二郎、母方の曾祖母は北島つです。本日母と共にまいりました。祖母に聞かされた雲峯さんの作品に接することができ、感無量です。ありがとうございます（60代、女性、千葉県）。

・企画と共にそれにあつた花（生花）を飾ってほしい（50代、女性、県内）。

・地図がすごいと思つた（50代、女性、安来市）。

・思つたよりずっと面白く見させてもらった。絵・写真のすごさにびっくりした（50代、女性、市内）。

・今回の様に、地元はまだ埋もれた文化人の紹介を期待します（60代、女性、出雲市）。

・昔のことについて細かく書かれていたし、実物もあつて、昔の物にインパクトがあつた（10代、男性、出雲市）。

・かつての松江を垣間見る中で、堀三代のお姿がウツスラと見え隠れいたしました。県外から住み30年。明治・大正・昭和の歴史を少々勉強したとはいえ、画学校は頭に入れていなかったのです。西茶町のどの辺りでしょうか。3. 11以降の今日、かつてのご努力に学ぶことは多々。倅せな一時でした。よくお調べになつていらつしゃいますね。興味が尽きませんでしたもの。ありがとうございます（60代、女性、市内）。

・やわらかい感じの写真が印象的でした。今日、本物が見られてよかったです（30代、女性、滋賀県）。

・次回は何か楽しみです（60代、女性、滋賀県）。

・ギャラリートーク、大変興味あるお話でした（70代以上、男性、市内）。

・キャプションの文字がもう少し大きいか、手前に於いてはどうか（70代以上）。

・藩士の明治維新という部分に興味を持ちました。大変面白かったです（30代、女性、県内）。

・野口さんの写真がたくさん見ることができて良かったです（20代、女性、市内）。

・二人（野口・堀）の距離が分りやすく示されていた（40代、男性、市内）。

・尺八が一番心に残りました（10代未満、女性、埼玉県）。

・堀市郎については、野口英世を描いた映画などで知っていましたが、松江の出身である事は知りませんでした。また先代が英世の故郷会津の領主であった事も、何か縁を感じました。また今回、秦佐八郎博士の写真が見つかったようで、とても驚きました(40代、男性、出雲市)。

・我々の知らぬ先達が、多数各地で活躍されたことを、嬉しく拝見した(70代以上、男性、市内)。

・暗くて大変読みにくく、見にくかった(50代、女性、広島)。

・小生も野口英世の留学したロックフェラー大学へ留学(H213)しておりましたので、興味深く拝見(60代、男性、江津市)。

・今まで知らなかった堀市郎という人と、その人をめぐる人々のことが分つて、興味深かったです(60代、女性、広島県)。

・よかったです(30代、女性、県内)。

・大変貴重な物を拝見させていただいて、とても興味深く思いました。素晴らしい企画ありがとうございます。野口英世の油絵もあつてビックリ。上手(40代、女性、鳥取県)。

「分析」 地元では知られていない事実を、発見・評価し、知らせる展示を求める意見が多い。また告知が足りないとの意見もあった。一部で、暗くて文字が読みにくく、見えにくかったという意見があった。作品保護のため、明るさについてはやむを得ないが工夫が必要な点である。文字については、高齢者が多いという点から、字体や字間、大きさなど配慮する必要がある。アンケートのほとんどが、展示を評価する内容であった。

⑧総合評価

地方の博物館ということもあり、60歳代以上の来館者が多い。また県内居

住者が7割を占める。観光客より地元住民の観覧者が圧倒的に多い。企画展を知ったきっかけは「ポスター・チラシ」(25%)と同数の「知人からの紹介」による来館者がいる。「ポスター・チラシ」をみて来た人たちが、同数のロコミによる観覧者を招いていることを意味する。また、企画展を見に来た人の半数が、松江歴史館に初めて来館した人であった。まだまだ来館していない地元住民が多く、来館するきっかけを創り出す必要がある。

また入館者(無料ゾーン)の1割しか企画展(有料)を観覧しておらず、入館した人に企画展まで見てもらう工夫が必要であることもわかった。基本展示(有料)を観覧する人が、入館者数(無料ゾーン)の5分の1である点と共に、対策を採るべき点である。

報道が展覧会前に集中し、展覧会開催後の報道が少なかった。そのため記事をみて関心をもった人が、すぐに展覧会へ足を運ぶことにはならなかった。ここから、報道は展覧会開催後に集中してとり上げてもらえるように、計画するようにすべきではないかと思われる。

企画展に対する評価は、観覧者の9割が満足したと回答し、好評であった。意見・感想では、地元ならではの展示を求める要望が強く、この点を意識した展示を今後も心がける必要がある。展示全体としては、新たな事実の発見を観覧者が知ることが出来た点に、観覧者の満足度が高く、かつ展覧会へのエールを多く得ることができた。

おわりに

企画展開催の経緯に見る通り、本展示は資料の発見から展示まで二年という、比較的短い調査期間での展示であった。一から調べ上げる展示であると

いう点では、二年は短く、担当学芸員としては常に時間との勝負であった。また、本企画展は、多くの報道が関心を示し、共同通信を通じてジャパンタイムスによる英字記事が世界に発信されたことも、人々の関心の深さが伝わってきた点である。ただ報道の関心が、そのまま観覧者数に結びついていない点、今後、より市民に関心をもってもらう工夫が求められる部分である。

アンケートを取ったこと自体は、観覧者がどのように思っているのかを知るきっかけとなった点で良かった。今後、項目に「どの点が良かったとおもいますか」といった、具体的に答える問いを設ければ、より具体的に改善作と評価された点が見えてくるのではないかと思う。

最後に、キャプションの文字の大きさについて述べておく。前回の企画展「京極忠高の挑戦」で、壁面のキャプションが、手前の平台のものと同じ大きさであったことから、字が小さく見えないと指摘をうけた。これを受けて、壁面のキャプションは平台に置くキャプションの一・三倍の大きさとした。

これにより、キャプションの文字の大きさについては、苦情をほとんどうけることがなくなった（アンケートで一人、改善の要望があった。因みに展示方法と展示空間は次の様にした。

展示方法

「設置位置」①一番手前に資料を置く。展示台手前から五cmの場所。②展示台キャプションは手前から五〇cmに立てておく。

「キャプションの中身」①キャッチコピーを最初の行に記す（手前HGゴシックE 41・32 pt。壁面HGゴシックE 53 pt）。②キャッチコピーの後に解説（手前ゴシックosaka 30 p。壁面HGゴシックE 39 pt）。文字量は拘らない。二〇〇字前後が多い。③解説の後に小さく資料名・員数・所蔵者を記す（手前ゴシック osaka 23 pt。壁面HGゴシックE 34 pt）。

平成24年企画展「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析（西島）

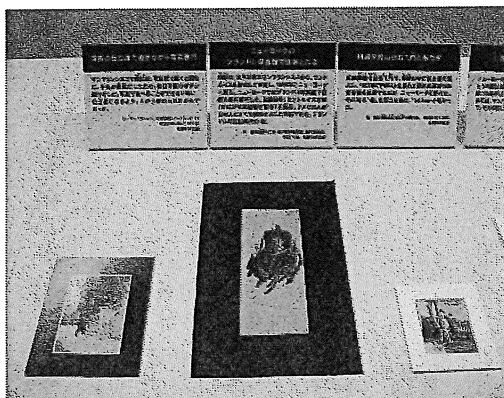
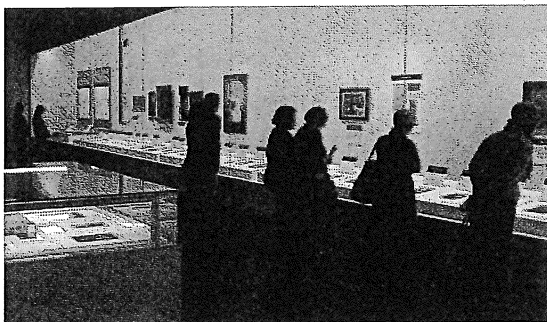
④文字資料には必ず意識を付ける。手紙などの内容の臨場感を知ってもらうため。釈文は関心のある人が図録で確認できるようにしている。

企画展示室

二七〇㎡の空間に、一九mの壁面ケースが左右に二つある。単体ケースは四体あり、うち二つが免震構造をもつ。全てLEDライトである。展示の流れは、キャプションが縦書きか横書きかできまる。今展示は横書きなので、右回りとなるようにした。縦書きの場合、左回り。

アンケートの回答に市内の五〇代女性が「展示の解説が丁寧で判りやすいものでした。このくらいの量の展示なら、疲れない程度で、全部読むことが出来ました」と答えているように、比較的狭い展示スペースの当館の場合、文字数に制限を加える必要はなく、観覧者が理解し、なっとくできる環境を作り出す方が優先されると、数回の展示経験から感じている点である。

（にしじま・たろう 松江歴史館学芸員）



展示会場の様子

松江歴史館

研究紀要

第3号

◆松江藩研究◆

城下町松江研究の現状と課題	西島 太郎	1
松平齊貴の上洛道中記録に見る旅の姿 ——「御上京一途」を参考として——	小山 祥子	27
松江藩儒黒澤石斎の研究（一）	西島 太郎	37
二人の甫庵 ——小瀬甫庵と山岡甫庵——	福井 将介	50
堀櫟山・市郎父子に関する新知見 ——展覧会開催後の調査より——	西島 太郎	73
資料紹介 安達家文書目録・翻刻（一）	新庄 正典	101
「三谷家住宅」調査報告書	足立 正智	130(31)
高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について ——近世大名墓と堀尾家の宗教的背景——	西尾 克己 稲田 信 木下 誠	160(1)

◆博物館研究◆

松江歴史館整備事業で生じた問題とその整理 平成24年企画展	大塚 享義	122(39)
「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析	西島 太郎	109

平成25年3月



松江歴史館

MATSUE HISTORY MUSEUM BULLETIN

No. 3 MARCH, 2013

CONTENTS

◆STUDY OF MATSUE CLAN IN THE EDO PERIOD◆

- Current Status and Issues of research MATSUE castle town----- NISHIJIMA Taro ---- 1
The figure of the trip seen to record the going-up-to-Kyoto trip
of the Matsudaira Naritake—Refer to a "Gojyoukyouitto" -----KOYAMA Sachiko---- 27
Study of SEKISAI KUROSAWA is a Confucian scholar
of MATSUE clan vol.1 ----- NISHIJIMA Taro---- 37
A research for "two persons ' Hoan (小瀬甫庵 and 山岡甫庵)" ---- FUKUI Masayuki---- 50
New knowledge about the father and son
REKIZAN and ICHIRO HORI-----NISHIJIMA Taro---- 73
Document introduction : A list and reprint of the document
of ADACHI (安達家) vol.1 -----SINSYO Masanori---- 101
Investigative report of MITANI house-----ADACHI Masanori---- 130 (31)
Religious background of early modern times -----NISHIO Katsumi---- 160 (1)
daimyo graves and the Horios
INATA Makoto
KINOSITA Makoto

◆MUSEUM STUDIES◆

- Problems and solutions associated with the construction of Matsue History Museum
-----OTSUKA Takayoshi---- 122 (39)
Recording and analysis of the exhibition. "Become a photographer grandson.
Son to become a painter of Matsue samurai" on exhibition
----- NISHIJIMA Taro---- 109

Published by
Matsue History Museum
Matsue, Japan

平成二十五年（二〇一三）三月二十九日発行

松江歴史館研究紀要 第三号

編集・発行 松江歴史館

住所 島根県松江市殿町二七九番地

〒六九〇一〇八八七

電話 ○八五二一五五一一六〇七

FAX ○八五二一三二一一六一一